

## [116]語文研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/1462191>

---

出版情報：語文研究. 116, 2013-12-26. 九州大学国語国文学会  
バージョン：  
権利関係：

## 《會員著書紹介》

木田章義 編

### 『国語史を学ぶ人のために』

本書は、日本語の歴史を研究するにあたり、どのような分野があるのか、どこまで研究がなされているのか、そして、これからのように研究されるべきかを概説したものである。本書の構成は以下の通り(節・コラムの項は頁の関係で割愛)。

「国語学」という分野

第一章	資料論	肥爪周二
第二章	表記史	鈴木功眞
第三章	語彙史	大槻信
第四章	音韻史	木田章義
第五章	文法史	青木博史
第六章	敬語史	森山由紀子
第七章	文体史	木田章義
第八章	国語学史	山本真吾

国語史関係年表  
参考文献

目次を一瞥するだけで、本書の記述が広い範囲にわたっていることが分かる。さらに、この中には、未だ定まった方法論や確立した定義がないもの、未着手の研究テーマが多く残る分野も取り上げられており、多岐にわたっていることがうかがえる。

しかし、本書の特徴は範囲の広さだけではない。日本語の歴史を考える上での文献に対する姿勢がはっきり示されているという特徴も見られる。はしがきの「『国語学』という分野」の中で、国語学は「古典籍そのものを分析し、それを言語・文学・思想などの研究資料とする」という点を指摘する一方、今日では言語学の一部分であると誤解され、国文学から分離させる傾向が強まったという。しかし、日本語の歴史を考える以上、文献学的知識は国語学に必須である。この点から本書は、どのような資料を選び、何に注意する必要があるかを、まず第一章の「資料論」において述べている。そして、第二章からの各論は、文献学的知識を踏まえた上で、各分野における概略を描き出したものである。

本書の意義は、各分野でどのような事がいわれているかを広く学ぶことができるだけにとどまらない。日本語を歴史的に考えるとどういふことか、その基礎となる資料は何か、そしてそれを用いてどのように述べることができるか、その方法についても学ぶことのできるものである。日本語の歴史に興味がある方々にとって、有益な概説書であるといえる。

(平成二十五年四月 世界思想社 B6版 三二八頁 二、九〇〇円+税)

田中道雄・田坂英俊・中森康之 編

『蝶夢全集』

本書は、近世中期を生きた文人僧蝶夢に関する作品を多数収録しており、蝶夢の全貌を知る上で欠かせない一書である。本書の構成は以下の通り(各篇の具体的な作品名は頁の關係で割愛)。

待望の全集——甦る文人僧蝶夢—— 島津忠夫

凡例

発句篇

文章篇

紀行篇

俳論篇

編纂的著作

編纂した撰集

解題

文人僧蝶夢——その事績の史的意義

年譜

同時代の主な蝶夢伝資料

田中道雄

蝶夢同座の連句目録

蝶夢書簡所在一覧

索引

あとがき

田中道雄

蝶夢に関する資料はあちこちに散らばっており、その全貌を掴むことは困難であった。それをこの一書が全集としてまとめ上げたことで、多くの人が蝶夢の全貌に触れることができるようになった。これは長年の蓄積と研鑽の賜であろう。

また、本書末部に備わる「文人僧蝶夢——その事績の史的意義」では、編者である田中道雄氏が蝶夢の事績を懇切丁寧に辿っている。蝶夢の生涯を概観し、その人間像を手紙や文人との交わりなどから考察し、さらには「主体のつよまり」という観点から蝶夢の新たな文芸理念にまで筆を進めている。蝶夢研究はもとより、近世文芸における「自我の主張」を考える上においても、本書が果たす役割は大きいであろう。

(平成二十五年五月 和泉書院 A5版 九七四頁 二四、一五〇円(税込))

高倉一紀・菱岡憲司・河村有也香 編

『小津久足紀行集（一）』

本書は、小津久足の未刊紀行文（写本）三点を翻刻し、その解題を示したものである。本書の構成は以下の通り。

解題

凡例

本文

よしの、山裏

花鳥日記

花鳥日記

残楓日記

小津久足は生前、刊行された書物は全くない。つまり、現存資料はすべて写本ということになる。では取るに足らない人物であるのか。その答えは彼の経歴を見れば、自ずと導かれる。

久足は伊勢松阪の豪商の出である。伊勢松阪と言えば国学者本居宣長のお膝元。久足は、宣長の実子、春庭に師事している。後に、春庭の息子の後見人となるなど、緊密な交流がある。さらには、もう一つ有名な所としては、やはり曲亭馬琴との関係である。その関係は馬琴自身が「三友」と

称するほど、親密な仲であった。それに応えるかのように、久足も馬琴の作品に関し、批評や感想を述べたことは研究者の間ではよく知られたところ。ただ、別の見方をすれば、馬琴の友人としてあまりに有名なために、それ以外の部分が陰に潜んでいた。ちなみに「東京物語」で有名な映画監督、小津安二郎は、久足の末裔という話もあり認知されていないのではなからうか。

しかし、彼の隠れがちな側面、即ち国学者や蔵書家、さらには紀行を中心とした彼自身の文芸活動は、春庭や馬琴との関わりを考える上でも、彼の思想が随所に散りばめられており興味深い。さらには、富裕な商人が趣味的風流の中で、如何に文芸に携わったかを知ることが、ひいては近世文芸史研究という立場から見ても、大変重要なことである。

近年、彼のそのような面へのアプローチが積極的に試みられるようになってきた。そこで本書の意義である。本書には、『よしの、山裏』『花鳥日記』『残楓日記』の翻刻と解題が収められる。これまで翻刻資料の数が少なく、写本でしか残っていないため、研究環境としてはより一層の充実化が求められている。そのような状況の中で、本書が備わったことは大変意義深い。

（平成二十五年三月 皇学館大学神道研究所 A5版 一五五頁）

## 入口敦志 編

### 『武家権力と文学』・柳営連歌、『帝鑑図説』

本書は、これまで研究史の中であまり語られることなかった將軍家や大名家の文学利用の問題を扱ったものである。芸術活動の政治利用と聞けば、ともすれば否定的な意味合いを帯びることがあろう。現に第二次世界大戦中、ナチスドイツが国威発揚のためにワーグナーの音楽を利用し、つい最近までイスラエルではワーグナーの音楽を演奏することはタブー視されていた。そして、今でもあまり好まれないという。

しかし、本書が目指すのはその是非を問うものではない。現実として江戸時代の、言わば権力機構がその威光を誇示するために、文学的活動を積極的に利用したという事実を掘りあげるところにある。あくまで「江戸」の文学の様相を探る一つの可能性を示す姿勢である。本書の構成は以下の通り（各節の具体的な項は頁の関係で割愛）。

## 序 章 武家の莊嚴

### 第一章 柳営連歌考

#### 第一節 將軍の連歌

#### 第二節 二丸権現様荒廃記

#### 第三節 御連歌由緒考

#### 第四節 稻荷社と柳営連歌

## 第二章 『帝鑑図説』考

### 第一節 模倣と変容——『帝鑑図説』受容発端——

### 第二節 唐冠人物の来歴

### 第三節 唐破風考

### 第四節 『帝鑑図説』の読まれかた——『帝鑑評』を中心に——

## 終 章 権力と出版

### 【『帝鑑図説』関係略年表】

### 【初出一覧】

### 【参考文献一覽】

### 【図版一覽】

## 索引

幕府で行われたことからそう呼ばれるようになったという柳営連歌は、二百年以上に渡り徳川家によって脈々と続けられながらも、これまで積極的に文学的価値を評価するものはなかった。そこで、まず幕府と連歌の関係を整理した上で（第一章・第一節）、三つの節を立て柳営連歌の文学的価値を見出す（第一章・第二、四節）。

『帝鑑図説』は中国に由来を持ち、一種の帝王学の教材として受容されたものが、如何に日本風に成っていくかという過程を追い、最後にその受容の様子を明らかにしている。

そして、終章において、『帝鑑図説』を中心に権力と出版の在り方を論じる。

冒頭でも触れたように、これまで「権力誇示の一環としての文学」という観点で江戸文学が論じられることはあまりなかった。しかし、そこから見えてくるものはまごうことなき江戸時代の一つの文芸活動の姿である。本書は新たな江戸文学観を提示したという点に置いて、大変意義深い。

(平成二十五年七月 ぺりかん社 A5版 二九二頁 六、三〇〇円＋税)

### 井上敏幸・伊香賀隆 編

### 『肥前鹿島福源寺小志』

福源寺は、佐賀県鹿島市西南、三嶽山東麓の野古見郷三川内の里に立つ古刹である。宋の無学祖元が渡来した際、滴水庵に観世音菩薩木像と龍女・善財の両脇士を安置したが、寛文八年、その故地に梅嶺道雪が再興したといわれている。本書は、その福源寺重興時点の様子や大正時代までの来由に関する資料、そして梅嶺道雪の伝記資料を収めたものであり、これを通して、福源寺の歴史の大略を知ることができる。本書の構成は以下の通り。

口絵  
凡例

- 一 円通山滴水福源禅寺重興編
- 二 円通山滴水福源禅寺重興編附
- 三 円通山福源禅寺規條
- 四 本山十六景・末寺
- 五 天照開山故法王梅嶺雪公和尚塔銘併序
- 六 法泉開山梅嶺雪公和尚行業記
- 七 円通山福源禅寺諸由略記
- 八 福源禅寺常住物簿
- 九 円通山滴水福源禅刹中興碑

### 解題

### 参考文献

あとがき

本書では、書き下し文・注釈・原文という形式で各資料の紹介がなされている。注釈では語注と簡潔な解釈・解説が記されており、巻頭の口絵には資料の写真が掲載されている。例えば、普明寺蔵「鍋島直朝像」や福源寺蔵「即非如一・梅嶺道雪蔵」の像讚、梅嶺の黄檗僧としての活動を伝える頭陀袋などである。

ところで、梅嶺は鹿島鍋島家第三代藩主直朝によって福源寺の再興を依頼されている。きっかけは、彼が、鹿島の滴水庵が無学祖元の故地であることを詳細に調べている秀れた学問僧であるという噂が直朝の耳に入ったためと考えられている。

る。ただし、無学祖元が鹿島に滞在した、あるいは通過したという事実は全く知られておらず、本書の七（円通山福源禪寺諸由略記）の記録が現在のところ唯一のものであるという。本書の最後では、無学祖元伝説の解明を、これからの福源寺・梅嶺研究において最も注意すべきことの一つとして位置付けている。

なお、本書に先立って出版された、井上敏幸・白石良夫編『肥前鹿島福源寺蔵書目録』（平成二十四年三月 佐賀大学地域学歴史文化研究センター）の書籍類も、梅嶺の黄檗僧としての活動の中に含まれるものであり、本書と同様、貴重な一冊である。

（平成二十五年三月 佐賀大学地域学歴史文化研究センター A5版 一七〇頁）